

① 魅力ある教師になるために

1 生徒との関係づくり

学校生活全般において、生徒との信頼関係を築きましょう。生徒の様子をよく観察し、よいことはしっかり褒め、時には見守る。一方、悪いことはきちんと粘り強く指導することで、教師に対する信頼は高まります。また、生徒の名前を早く覚えるように努力し、積極的に自分から声をかけることで良好な関係を築きましょう。普段のなにげない会話や表情から生徒のちょっとした変化を感じ取れるようにすることが大切です。

2 チームワーク

教師がお互いに支え合い、学び合える関係を構築することは、学校全体の組織力となり、その結果、生徒の成長につながります。社会人になると、その責任感のために自分のことは自分でやらなければならないと思い、誰にも相談できずに悩みを抱え込んでしまうことがあるかもしれません。各学校には必ず経験豊富な先生方がいらっしゃるのだから、困ったときは相談し、問題を共有することによって個ではなくチームで指導に当たるように心がけましょう。「分からないこと、困っていることを相談できる」、これは教師にとって大切な資質です。

3 授業づくり

全ての生徒にとって学校生活の基盤となるのは授業です。授業をよりよい学びの場とするために、生徒が積極的に参加でき、達成感や満足感を味わえるような授業づくりを心がけましょう。生徒からの質問に対しては、丁寧に答え、もし分からなければ次回の授業までに調べて確認してから答えるなど、誠実な対応を心がけましょう。



また、生徒の取り組み状況をよく観察し、理解度や到達度を把握しながら授業を進めることも大切です。各単元には、そこで生徒に身に付けさせたい技能や表現があります。指導と評価の一体化を図り、その振り返りを授業改善に生かしていきましょう。

4 自己啓発・自己管理

「こんなふうにしたら、もっとよくなるかもしれない」という発想を常にもって生徒と向き合うことが大切です。教師には幅広い知識と教養が求められます。まずは、教師として自身の英語力の向上を図りましょう。研修を通して研鑽を積むことや検定試験を積極的に活用することも有効な方法です。また、教材の背景知識や映画、音楽、ニュースなど生徒の意欲を喚起するような話題を日頃から蓄えておく必要もあります。

さらに、魅力ある教師として活躍するために、心身ともに健康であることが大切です。教師には授業だけでなく、多岐にわたる仕事があります。特に若い頃は無理をしがちです。オンとオフの切り替えをうまく行い、勤務時間内で効率よく業務を行うことを心がけましょう。

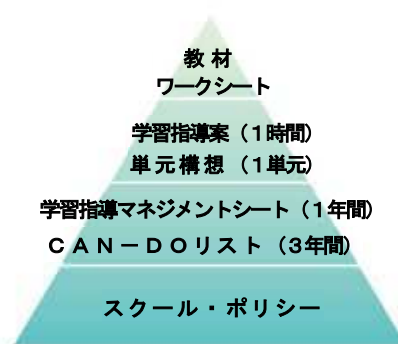
② いま英語教育に求められるもの

グローバル化や情報化が進展する社会において、子どもたちは予測できない未来に対応し、よりよい人生を自ら創り出していかなくてはなりません。そのために、学校教育には、自ら問いを立て解決を目指す力、他者と協働しながら新たな価値を生み出していく力、膨大な情報から何が重要かを主体的に判断する力などの育成が求められます。このような状況の中で英語教育が果たす役割として、外国語の背景にある文化に対する理解を深め、英語で主体的にコミュニケーションを図ろうとする態度や、実際のコミュニケーションの中で知識を適切に活用する技能の育成などが挙げられます。ここでは、生徒の将来を見通した上で、高等学校における英語教育が効果的なものとなるための指針を示します。

1 CAN-DOリストの活用

生徒がどのような英語力を身に付けることができるのか、高校卒業時及び学年ごとの「学習到達目標」として示した各学校のCAN-DOリストを活用しましょう。教師にとって、生徒の学びをサポートするための共通の指針となるだけでなく、生徒にとっても、学習到達目標を基に見通しを立てて学習に取り組む手助けとなります。また、他教科や同学年のスタッフ、保護者にもCAN-DOリストを示し、学習到達目標を共有しましょう。このCAN-DOリストを基に、学習指導マネジメントシートを作成します。その指導計画を基に単元構想を練り、各単元の目標を達成するための言語活動や、単元の評価規準と評価方法を、評価の観点や4技能5領域のバランスを考慮しながら定めます。

日々の授業が、右上の図のように、スクール・ポリシー、CAN-DOリスト、学習指導マネジメントシート、単元構想などそれぞれに基づいたものであることを常に意識し、つながりのある一貫した指導を心がけましょう。また、PDCAサイクルを意識し、各学期末や学年末に生徒の学習到達目標を確認するとともにCAN-DOリストの見直しを図り、授業改善につなげていくことが必要です。



2 新しい時代に求められる資質・能力の育成

学びを人生や社会に生かそうとする「学びに向かう力・人間性」の涵養

「学びに向かう力・人間性」を養うためには、「主体的・対話的で深い学び」を実現させることが必要です。そのためには、自ら課題を発見し、その解決に向けてペアやグループで取り組み、理解を深めるような学びを多く取り入れましょう。例えば、教科書の題材に応じて、環境問題の解決や宇宙開発の在り方など、答えが一つに限定されない課題について、ディスカッションやディベートの形で取り組む活動があります。学び合いや考えを伝え合う活動を通して必要な知識やさまざまな情報が結び付き、内容理解が深まることで、学習への動機付けや興味・関心がさらに高まることが期待できます。学習の過程で生徒の思考が活性化され、より広い視野から問題を捉え、課題を解決する力を養うことを目指しましょう。

未知の状況にも対応できる「思考力、判断力、表現力等」の育成

授業を実際のコミュニケーションの場面とするために、生徒同士が自分の意見や考えを英語で伝え合う機会を授業の中で設定することが必要です。言語活動を行う上で、「聞くこと」「話すこと(やり取り・発表)」「読むこと」「書くこと」を効果的に結び付ける工夫をしましょう。例えば、「読むこと」や「聞くこと」によって概要や要点を捉えさせ、それについて英語で話し合わせたり、話し合った内容の要約文を書かせたりすることで「話すこと」や「書くこと」につなげることができます。さらに、題材の内容に関して、自分の意見や考えを発表したり討論したりする活動に発展させることもできます。各技能を個別に扱うのではなく、複数の技能を互いに関連付けながら、4技能5領域を統合的に活用できるコミュニケーション能力を育成することが必要です。

特に、多様な考え方が可能な話題について意見を伝え合う活動を設定し、即興で話したり論理的に表現したりする力を養いましょう。例えば、授業にスピーチやプレゼンテーション、ディスカッションやディベートなどの言語活動を取り入れることにより、自分の意見の論点や根拠を明らかにして相手に分かりやすく伝え、相手の質問や反論に即興で対応する力を育成できると考えられます。その際、論理の展開や表現の方法を工夫させることや、ICT機器を用いて意見の裏付けとなる情報や資料を生徒が自主的に探し活用できるよう指導することも大切です。また、聞き手は話し手に質問や感想を返すなど、即興のかつ双方向的な活動を目指しましょう。

生きて働く「知識・技能」の習得

「主体的・対話的で深い学び」を実現させるためには、豊かな知識と技能が必要です。伝え合う活動などを通して知識・技能の必要性を生徒自らが感じ取り、「もっと語彙や表現を知りたい」と意欲的にインプットに取り組むことができるようになります。そのためには、例えば「電話の応答」「日本文化の紹介」のような具体的な言語の使用場面や状況を設定することが有効です。常にアウトプットを意識させながら、ペアやグループによる言語活動に取り組みせましょう。新しい知識を理解してから使わせるのではなく、生徒に使わせながら気付きや理解を促すよう指導するとより効果的です。文法や語彙などの知識を“コミュニケーションの支柱”として捉え、活用できる知識・技能の定着を図りましょう。

3 学習評価の工夫

「指導と評価の充実に向けて ～学習評価の工夫改善を意識した学習指導のポイント～」(愛知県総合教育センター)にも、詳しく解説されています。

(1) 観点別評価

学習到達目標に照らして、生徒の学習状況を「知識・技能」「思考力・判断力・表現力」「主体的に学習に取り組む態度」の3観点から評価します。それぞれの観点について、学習指導マネジメントシートや単元構想の中で単元の評価規準を設定し、評価方法を明確にします。方法の一つとして、定期考査の設問ごとに評価の観点を明示し、答案返却後、生徒に観点別の学習到達度を把握させるなどの工夫も効果的でしょう。さらに、定期考査だけでは測ることのできない力を評価し、生徒の学びを見取るために、パフォーマンステストを実施したり、授業中の活動を継続的に観察したりすることが求められます。

(2) パフォーマンス評価

年間を通して4技能5領域を総合的に評価するために、パフォーマンステストを実施することが必要です。スピーチ、プレゼンテーション、エッセー・ライティング等に取り組みさせることで、身に付いた力を評価します。パフォーマンス評価を行う際には、測りたい能力(評価項目)を明確にした上で、ルーブリック(評価基準表)を作成しましょう。教師間で「何をどのように評価するのか」という基準を共有することにより、評価に差が出にくくなり、評価の信頼性が高まります。また、生徒にルーブリックを事前に示すことで、生徒は何を学ぶべきかが分かり、学習に取り組みやすくなります。タブレット端末などを活用し、パフォーマンスの様子を記録することも可能です。生徒の学習成果や課題を的確に把握し、それらを生徒に還元することで、学習の改善につなげることができます。また、評価を教師の振り返りや授業改善にも生かし、指導と評価の一体化を図りましょう。

【関連資料】パフォーマンステストのルーブリック(例) プレゼンテーション 領域:「話すこと(発表)」

《内容》「多文化共生に向けて自分たちにできること」: アイディア・企画を具体的かつ論理的に口頭で伝える。

《採点の基準》

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に素手に取り組む態度
a	[知識] 語彙や表現が適切に使用されている。 [技能] 聞き手に分かりやすい音声等で話している。	詳細な具体例とともに論理的に発表しており、聞き手に訴えかけるプレゼンになっている。	原稿から目を上げアイコンタクトをとり、堂々とした態度で語るなど、プレゼンをよりよいものにしようとしている。
b	[知識] 多少の誤りはあるが、理解に支障のない程度の語彙や表現を使って明瞭に話している。 [技能] 声の大きさ、発音、明瞭さは平均的である。	論理性や具体性にやや欠ける部分もあるが、プレゼン内容としては理解に支障がない。	原稿に視線を落とすことが度々あるものの、アイコンタクトや堂々とした態度に留意して発表しようとしている。
c	bを満たしていない。	bを満たしていない。	bを満たしていない。

③ 授業を実際のコミュニケーションの場とするために

理論編

1 英語で授業を行うことのねらい

高等学校学習指導要領(平成30年告示)では、授業を英語で行う目的を以下のように示しています。

生徒が英語に触れる機会を充実するとともに、授業を実際のコミュニケーションの場面とするため、授業は英語で行うことを基本とする。

つまり、授業を英語で行うことのねらいは以下の二つです。

- ① 生徒が英語に触れる機会を充実する
- ② 授業を実際のコミュニケーションの場面とする

生徒は授業外で英語に触れることが少ないため、授業で英語に触れる機会を増やすことが欠かせません。生徒同士または生徒と教師が英語でやり取りする場面をできるだけ多く設定しましょう。教師が英語を使用する際は、生徒の実態に配慮しながら理解可能な英語を使用しましょう。教師が意欲的に英語を使ってコミュニケーションする姿は、生徒にとってのロールモデルとなります。

2 外国語科の目標を理解しよう

高等学校学習指導要領(平成30年告示)で外国語科の目標を確認してみましょう。

外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方を働かせ、外国語による聞くこと、読むこと、話すこと、書くことの言語活動及びこれらを結び付けた統合的な言語活動を通して、情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力を次のとおり育成することを目指す。(以下略)

外国語科の目標は、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成することだと分かります。

高等学校学習指導要領解説では、コミュニケーション能力という言葉について、CEFR(Common European Framework of Reference for Languages: Learning, teaching, assessment 外国語の学習・教授・評価のためのヨーロッパ言語共通参照枠)より引用し、三つの能力を紹介しています。

communicative competence (コミュニケーション能力)

- ① linguistic competence : 語彙・文法能力(語彙・文法などの知識と技能)
- ② sociolinguistic competence : 社会言語能力(社会的文脈などを考慮して言葉を使える力)
- ③ pragmatic competence : 語用論的言語能力(場面・状況・相手などを考慮して言葉を使える力)

コミュニケーション能力は、語彙や文法などだけではなく、文化や社会、コミュニケーションの目的や場面、状況への配慮からも構成されていることが分かります。このことは、「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」でも共通しています。

「外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方」

外国語で表現し伝え合うため、外国語やその背景にある文化を、社会や世界、他者との関わりに着目して捉え、コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築すること

言語活動を行う際には、この見方・考え方を働かせる必要があります。情報や考えなどを的確に理解したり、適切に表現したり伝え合ったりするためには、言語そのものだけではなく、文化やコミュニケーションの場面等を考慮する必要があることが分かります。日頃の授業においても、目的・場面・状況を意識した言語活動を行い、授業が本物のコミュニケーションの場となるようにしていきましょう。

3 言語活動について確認しよう

言語活動とはどのような活動のことを言うのでしょうか。発音練習や音読などは英語を声に出していますが、言語活動と言えるのでしょうか。「小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック」（2017年文部科学省）では、以下のように示されています。

言語活動は、「実際に英語を用いて互いの考えや気持ちを伝え合う」活動を意味する。（中略）英語を用いず、日本語だけで情報を整理しながら考えなどを形成する活動は、外国語活動や外国語科においては言語活動とは言い難い。一方で、英語を用いているが、考えや気持ちを伝え合うという要素がない活動も言語活動であるとは言い難い。例えば、発音練習や歌、英語の文字を機械的に書く活動は、言語活動ではなく、練習である。練習は、言語活動を成立させるために重要であるが、練習だけで終わることのないように留意する必要がある。

学習指導要領が示す外国語の目標は、「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」の育成であることから、コミュニケーションの要素には、以下の三つが含まれていることに留意しなければなりません。

- ① 理解する
- ② 表現する
- ③ 伝え合う

相手の伝えたいことをよりよく理解したり、自分の考えや気持ちをより伝わりやすく表現したりしようという姿勢を養いながら、双方向に情報が行き来する「伝え合う」言語活動を目指しましょう。

4 支援しながら言語活動を取り入れよう

高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では、支援について以下のように説明しています。

高等学校では、外国語科で扱う内容が高度化・複雑化し、各科目ごとに目標とする水準が異なることを踏まえ、実際のコミュニケーションの過程で考えられる様々な配慮などを、目標において「支援」と総称することとした。これは実際のコミュニケーションを行う上で、例えば、①聞き手に合わせて話す速度や情報量が調整されたり（「聞くこと」）、②読み手に合わせて使用される語句や文や情報量が調整されたり（「読むこと」）、③話し手に、使用する語句や会話や発表の仕方などが与えられたり（「話すこと [やり取り] [発表]」）、⑤書き手に、書く際に有用な語彙や表現などが与えられたり（「書くこと」）するなどの前提条件があれば、それぞれの目標を達成することができることを示している。

教材研究などの授業準備を行う過程で、生徒が活動中につまずきそうな点に気が付くことがあります。このとき、私たちは三つのことを考える必要があります。

- ① 各科目の目標において示されている支援の程度はどれくらいか
- ② 課題の遂行に当たり生徒がどの程度自分の力で対処できるか
- ③ どのような配慮があれば課題を遂行できるか

このような配慮を学習指導要領では「支援」と総称しています。①について言えば、支援を行う程度は科目の段階とも関わっています。高等学校学習指導要領解説では、「『多くの支援を活用』する段階の初期においては、中学校における学習との接続に留意し、高等学校における学習に円滑に移行できるよう、言語活動において様々な配慮が必要」とされています。この「様々な配慮」の具体として、言語的な配慮（使用する語彙を易しい表現に置き換えたり、発信する上で有用な語彙を事前に示したりする）と運用上の配慮（生徒に与える情報量を調整したり、やり取りの仕方を活動前に見せたりする）があります。その一方で、配慮し過ぎることで、生徒が学習を深める上で有意なつまずきを取り除いてしまったり、コミュニケーションを行った後の振り返りが深まらなかつたりすることも起こりかねません。生徒の学習段階や実態に基づいて、適切に支援を活用させることを心がけましょう。

5 扱う話題について考えよう

高等学校ではどの科目においても「日常的な話題」及び「社会的な話題」を扱うことになっています。高等学校学習指導要領解説外国語編英語編で詳細に見てみましょう。

高等学校ではどの科目においても「日常的な話題」及び「社会的な話題」を扱う。(中略)生徒の発達の段階や習熟の状況などに応じて、高校生にとって興味・関心のある話題を取り上げながら、徐々に、時事的な話題や学術的な話題で、より抽象度が高い内容や詳細で具体的な情報などを扱っていくことが考えられる。

生徒が主体的、自律的にコミュニケーションを図る授業を展開する上で忘れてならないのは、伝え合う内容そのものに目を向けることです。生徒の知的好奇心を刺激する教材を利用したタスクに取り組んだり、課題を解決するために対話を通じてメンバーの価値観の相違点を確認したりする中で、生徒は言葉として英語を扱うようになります。相手の発話内容が分かっているような紋切り型のやり取りでは、たとえ活発にコミュニケーションをしているように見えたとしても、授業で求められるコミュニケーションとしては不十分であるということです。教材研究では教材のテーマの背景知識を調べ、内容について理解を深めるとともに、教材の内容と生徒との関わりを捉えることが必要です。創意工夫を心がけ、生徒から『知りたい』『伝えたい』『解決したい』といった心の声を引き出せるような授業の導入や言語活動を創出したいものです。

実践編

1 継続的な帯活動を取り入れよう！

今回の学習指導要領改訂は、発信力強化を図る科目として「論理・表現」を設定したり、「話すこと」の領域が細分化され「話すこと [やり取り]」と「話すこと [発表]」の二つに整理されたりするなど、英語での発信力強化に焦点を置いたものとなっています。特に、やり取りの重要性については、高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では、CEFRからの引用を基に次のように説明しています。

「話すこと」のやり取り (interaction) では、少なくとも2人以上の個人が言葉のやり取りをし、その際、産出的活動と受容的活動が交互に行われ、口頭のコミュニケーションの場合は同時に行われることもある。対話者が同時に話し、聞くだけではなく、聞き手は話し手の話を先回りして予測し、その間に答えを準備するなど、やり取りは言語使用と言語学習の中でも大きな重要性が認められることから、コミュニケーションにおける中枢的役割を果たしているとされている。

(下線部は筆者による)

ここでは、すぐに実践できる言語活動を紹介します。

(1) Small Talk

ここでの Small Talk とは、即興で与えられた話題について教師の質問を活用しながら会話を継続させる活動です。以下のような与えられたトピックと質問についてペアを変えて同じトピックについて会話をします。パワーポイントを使用すれば、毎回板書する手間がなくなり、より便利になります。また、表示内容を徐々に減らし、3回目には見ないで会話ができるように促していくと緊張感をもって行うことができます。

Food <ul style="list-style-type: none"> • What food do you like? • When do you want to eat it? • What food do you dislike? Why? 	Subject <ul style="list-style-type: none"> • What subject do you like? • Why do you like it? • How often do you study it?
Animal <ul style="list-style-type: none"> • What animal do you like? • Where do you see the animal? • What animal do you want to have? 	Subject <ul style="list-style-type: none"> • What subject do you like? • How often do you do it? • Why do you like it?

また、以下に三つのヒントを紹介します。

- ① 立って活動を行う (ジェスチャーやアイコンタクトが活発になる)
- ② 目標時間を決める (達成感や緊張感を高める)
- ③ 教師は生徒の会話に耳を傾け、気付いたことを全体に共有する (生徒の発話の質と量を高める)

POINT コミュニケーション・ストラテジーを導入する

上述したように、コミュニケーションとは、表現すること、理解すること、そして伝え合うことです。こういったコミュニケーションを円滑にするための表現が高等学校学習指導要領には取り上げられています。

コミュニケーションを円滑にする		
・ 相づちを打つ	・ 聞き直す	・ 繰り返す
・ 言い換える	・ 話題を発展させる	・ 話題を変える など

これらの表現はコミュニケーション・ストラテジーと呼ばれています。コミュニケーション・ストラテジーには「聞き直す」「繰り返す」「言い換える」「話題を発展させる」などがあります。ここでは、基本的な Rejoinders (相づち) や Shadowing (オウム返し), Follow-up questions (追従する質問) を以下の表にまとめ、紹介します。

Rejoinders	Oh, I see / Really? / Great! / Wow!	
Shadowing	例1 A: Have you ever been to Tokyo?	B: <u>Tokyo</u> ? Yes.
	例2 A: I watched a soccer game yesterday.	B: Oh, <u>a soccer game</u> ! Nice.
Follow-up Questions	A: I like watching sports.	B: <u>What sport</u> ?
	A: Basketball.	B: <u>Who is your favorite basketball player</u> ?
	A: I like John Smith the best. He is	

これらのコミュニケーション・ストラテジーを聞き手が使用することで、話している生徒は「聞いてくれている」という安心感を得ることができます。英語を話すことに不安感がある生徒に効果的です。授業でコミュニケーション・ストラテジーを導入する際には、生徒が無意識に使うようになるまで練習する必要があります。そのため、生徒の状況を確認しながら、少しずつコミュニケーション・ストラテジーを導入することが大切です。Rejoinders や Shadowing が自然とできていない状態で Follow-up questions を導入すると、会話が盛り上がりず、続かないことが考えられます。高等学校学習指導要領解説外国語編英語編の中でも、聞き手と話し手への配慮について書かれています。


例えば、コミュニケーションの目的に応じて聞き手の理解の状況を確認しながら話しているか、相手の発話に反応しながら聞き続けようとする態度を示しているかなど、相手への配慮が求められることになる。

(2) Mind Map

Mind Map では、与えられた話題についてアイデアを自分で出したり、クラスで出し合ったりしながら、自分とクラスメイトとの情報を共有し、最終的にはライティング活動に結び付ける活動です。

- ① 与えられたトピックについて自分で書ける限り、キーワードを書く。
- ② 三つの質問に答え、自分のアイデアを文章にする前に生徒同士で話し合う。
- ③ 周りの意見や表現を参考にして、与えられた時間書き続ける。

生徒は、与えられた質問を参考にしたり、周りの意見を参考にしたりして、多くの支援を活用しながら、ライティング活動に取り組むことができます。

Topic	① Food				
Mind Map					
Q1	What food do you like the best? I like ○○○ the best.				
Q2	When do you want to eat it? I want to eat it for (breakfast / lunch / dinner)				
Q3	What food do you dislike? (dislike 嫌い) I don't like ○○○.				
					20
					40
					60

(3) Free Writing

Free writing では、教師が複数のトピックを生徒に提示し、生徒が自分でトピックを選び、決められた時間（例えば5分間）書き続ける活動です。この活動の目的は、たくさん書くことにあるので、文法やスペリングの間違ひは過度に気にしないように指導するとよいでしょう。また、「書くこと」から話すことへ結びつけることも可能です。書いた内容について“What did you write about?” とペアで尋ねることで、「書くこと」と「話すこと」との技能の統合ができます。

POINT 辞書やインターネットに頼りすぎない

生徒が書いたり話したりする際に、辞書やインターネットで調べた語彙や表現を用いることがあると思います。しかし、このような場合、結果として、よく知らない語彙や表現を用いたために、自分はもちろん、読み手や聞き手も理解できなくなってしまうことがあります。辞書やインターネットで調べることも必要ですが、使い方には注意が必要です。また、書いたり、話したりする際に用いる単語のレベルについて高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では次のように述べています。

生徒の発達の段階に応じて、聞いたり読んだりすることを通して意味を理解できるように指導すべき語彙（受容語彙）と、話したり書いたりして表現できるように指導すべき語彙（発信語彙）とがあり、ここで示されている「400～600 語程度」の全てを生徒が発信できるようにすることが求められているわけではないことにも留意する必要がある。特に高等学校においては、中学校までに学習した 2,500 語程度をできるだけ発信語彙として用いる機会を豊富に提供することが重要である。

（下線部は筆者による）

英作文の場合、授業では辞書やインターネットの使用を制限して、発信語彙を活用させることができますが、家庭学習等でライティングの課題を出した場合には、使用する語彙を十分に管理することはできません。したがって、書いたことを基に発表をさせたり、その後に質疑応答や意見交換をさせたりすることで、目的・場面・状況に応じた語彙について生徒に考えさせることも必要です。

(4) Picture Describing

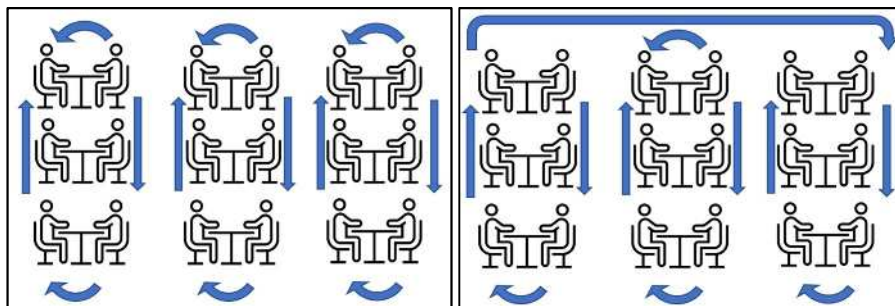
Picture Describing とは、教師がイラストや写真を掲示し、生徒がその絵について話し合うという活動です。ここでは、絵の状況を説明することと、絵について思うことの見聞交換をします。また、同じ質問であっても、絵だけ変えれば場面や状況を変えることができるので、フリー素材をダウンロードして使用することがおすすめです。

1. What do you see?
2. What is he/her doing? (What are they doing?)
→Why?
3. What do you think of this picture?
→Why?



POINT ペアを変える方法とその役割

ペアを変える方法にいくつかのバリエーションがあると生徒は飽きずに活動に参加できます。また、英語が得意な生徒同士や英語が苦手な生徒同士がペアを組むこともあれば、英語が得意な生徒と苦手な生徒がペアを組むこともあ



ります。そういう中で、ペアワークがうまくいくペアもあればうまくいかないペアもあります。そのためにも、1時間の中でペアを変えることで、最初はうまくいなくても、別のペアでも活動することができるのであれば、次は成功させようと思う気持ちが湧いてきます。

高等学校学習指導要領解説外国語編英語編では、即興で話して伝え合う活動について次のように説明しています。

即興で話す力は、一度の授業や言語活動で身につくものではない。様々な機会をとらえて即興で話す活動を継続的に進めていくことが大切である。

このようなことから、ペアを変えながら、繰り返し言語活動を行い、コミュニケーションを図る資質・能力を身に付けさせていくことが大切です。

2 教科書を読んだ後の活動を取り入れよう！

「英語コミュニケーションⅠ」を例に挙げると、思考力、判断力、表現力等を育成するために、英語を聞いたり読んだりした後は、その内容を話したり書いたりしたことを伝え合うことが示されています。

ア 日常的な話題や社会的な話題について、英語を聞いたり読んだりして、情報や考えなどの概要や要点、詳細、話し手や書き手の意図などを的確に捉えたり、自分自身の考えをまとめたりすること。
イ 日常的な話題や社会的な話題について、英語を読んだり聞いたりして得られた情報や考えなどを活用しながら、話したり書いたりして情報や自分自身の考えなどを適切に表現すること。
ウ 日常的な話題や社会的な話題について、伝える内容を整理し、英語で話したり書いたりして、要点や意図などを明確にししながら、情報や自分自身の考えなどを伝え合うこと。

この活動を授業では以下のような流れで実践していきます。

- ① 教科書を読む（内容理解を促すために True or False や Q & A を活用する）
- ② 読んだ内容を図式化する（Mind Map や表、ベン図、比較表など）
- ③ 口頭や筆記で自分の言葉を使って再生する

単語や文法を学習するためには音読させることも必要ですが、音読が授業の目的とならないように配慮しなければいけません。また、生徒同士でやり取りをさせる場合は、生徒が話しやすいように以下の英語を出だしとして話し合うと生徒もスムーズに話し合いが始められます。

Do you think ...?	What do you think of ...?
Do you want to ...?	Would you ...?
What ... would you like to ...?	What ... do you want to ...?
What ... do you recommend to ...?	How do you ...?
Do you ...? Why?	Why do you think ...?
Which do you like better, A or B?	What do you think is important when ...?
If you were ..., what would you ...?	Do you agree or disagree? Why?

帯活動を通して即興で話し合うことができるようになってくると、教科書本文についての話し合いも盛んに行われるようになります。日々の積み重ねが大切な英語学習では、コミュニケーションの場を授業でたくさん提供する必要があります。

3 おわりに

「言うは易く行うは難し」ということわざが示すとおり、これら全てに気を配って授業づくりや授業運営を行うというのは直ちにできることではありません。また、いつも、計画したとおりに授業が進むわけではありません。日頃から授業中の生徒の反応をよく観察したり、発話に耳を澄ましたりして、徐々に改善していくことが大切です。生徒は、時に、予想以上の活動をすることもあります。そのような成長を見られるのも教職の醍醐味です。

授業の一部だけでも改善してみるなど、できそうなことから少しずつ諦めずに取り組んでいくことが授業改善の秘訣だと思います。

④ 評価の仕組みづくり

高等学校では、令和4年度新入生より新しい学習指導要領（平成30年改訂）に基づく授業が年次進行で実施されています。この学習指導要領の中で「学習評価」の在り方が改めて規定されたことにより、多くの高等学校が評価の仕組みづくりに力を入れて取り組まれていることと思います。この章では、学習評価の基本的な考え方を確認した上で、評価の仕組みづくりの手順を具体例とともに説明します。

1 新学習指導要領における学習評価

「学習評価」に関わる学習指導要領の変更点

英語教育の課題	➡	新学習指導要領での対応
・外国語運用能力の向上	➡	<ul style="list-style-type: none"> ・話すこと、書くことによる発信能力の育成強化（「論理・表現Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ」の創設） ・「話すこと [やり取り]」の領域を設定 ・「外国語を使って何ができるようになるか」を念頭に置いた「生涯にわたり学習する基盤」の育成 ・「見方・考え方」を働かせた「生きて働く力」の育成
<ul style="list-style-type: none"> ・学校種間の接続の円滑化 ・学習評価に基づく授業改善 ・学習評価手法の統一 	➡	<ul style="list-style-type: none"> ・育成すべき三つの資質と能力の明確化 ・学校種間の学びの接続及び統合的な言語活動を一層重視 ・中学校の学習内容の定着（「英語コミュニケーションⅠ」の創設） ・PDCAサイクルを用いた「指導と評価の一体化」 ・評価観点の明確化と観点別評価の普及 ・授業改善や組織運営の組織的、計画的な改善（カリキュラム・マネジメント）
<ul style="list-style-type: none"> ・知識偏重からの脱却 ・言語活動の充実（特に複数領域を統合した活動及び「即興性」のある活動） 	➡	<ul style="list-style-type: none"> ・知識・技能のコミュニケーションでの活用 ・思考・判断・表現を繰り返すことによる学習の深化 ・パフォーマンス活動及びパフォーマンス評価の充実 ・複数の領域を関連付けた統合的な言語活動の実施

2 学習評価の考え方

○適切な目標を設定し、適切な評価規準を作成する（どういった力を育成するのか）

○「生きる力」の育成、具体的には以下の三つの資質、能力を育成する

①「知識及び技能」（「何を理解しているか、何ができるか」）

②「思考力・判断力・表現力等」（「理解していること・できることをどう使うか」）

③「学びに向かう力・人間性等」（「どのように社会・世界と関わり、よりよい人生を送るか」）

➡各教科の目標はこの三つの柱に基づいて設定

➡三つの目標を三つの観点で評価する（一体的に育成）

3 評価の3観点

外国語科の目標：「情報や考えなどを的確に理解したり適切に表現したり伝え合ったりするコミュニケーションを図る資質・能力」を育成

「知識・技能」	知識：外国語の音声や語彙，表現，文法，言語の働きなどについて理解を深めている。 技能：外国語の音声や語彙，表現，文法，言語の働きなどの知識を，聞くこと，読むこと，話すこと，書くことによる実際のコミュニケーションにおいて，目的や場面，状況などに応じて適切に活用できる技能を身に付けている。
「思考・判断・表現」	コミュニケーションを行う目的や場面，状況などに応じて，日常的な話題や社会的な話題について，外国語で情報や考えなどの概要や要点，詳細，話し手や書き手の意図などを的確に理解したり，これらを活用して適切に表現したり伝え合ったりしている。
「主体的に学習に取り組む態度」	外国語の背景にある文化に対する理解を深め，聞き手，読み手，話し手，書き手に配慮しながら，主体的，自律的に外国語を用いてコミュニケーションを図ろうとしている。

4 学習評価の仕組みづくり

ここからは，学習評価を実施するに当たり準備することを四つのステップで説明していきます。これらの仕組みづくりは年度開始前に行っておくことが理想的です。しかし，実際には日々の学習指導を進める中で評価項目を新たに設定したり，見直したりすることも十分あり得ます。大切なことは，評価項目の設定においても，それを見直す場合においても，教師間で情報を共有し，指導と評価の目線合わせをすることです。

〈学習評価の仕組みづくり〉

- Step 1** 学年ごとの目標の設定（CAN-DOリストの作成）
- Step 2** 各単元の観点別評価規準の設定（学習指導マネジメントシートの作成）
- Step 3** 詳細な評価計画の作成
- Step 4** 各活動の評価基準表（ルーブリック）の作成

Step 1 学年ごとの目標の設定（CAN-DOリストの作成）

学習評価を実施する前提として，高校3年間で外国語（英語）の学習指導を通じてどんな力を身に付けさせたいか，その目標を決めておく必要があります。学習指導要領に示す目標や内容に照らし合わせて学習状況を評価することを「目標準拠評価」と言います。外国語科においては，CAN-DOリストを用いて，各学年について目標設定を行ってきました。これは，「外国語を使って何ができるか」という観点から「～できる」という能力記述文で表記された「学習到達度目標」です。『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DO リスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』（文部科学省 2013年）にはCAN-DOリストを作成する目的として以下の3点を示しています。

- 外国語能力向上のために，生徒が身に付ける能力を各学校が明確化し，教員が生徒の指導と評価の改善に活用する。
- 学習到達目標を，言語を用いて「～することができる」という能力記述文の形で設定することにより，学習指導要領を踏まえた，4技能を有機的に結び付け，総合的に育成する指導につなげる。
- 教員と生徒が外国語学習の目標を共有する。

CAN-DOリストは各校で設定することになっています。そのため，その記述が各校の実態に合っていることはもちろん，上記の目的に適うように適切に運用されていることも大切です。

パフォーマンステスト 「話すこと [やりとり]」	ペーパーテスト 「読むこと」	ペーパーテスト 「書くこと」	学期末の 観点別評価	学期末の評定
a	a	a	B	4
b	b	b	B	
a	/	a	A	

※各活動の評価の基準 a…十分満足できる b…おおむね満足できる c…努力を要する

※観点別評価の基準 A…十分満足できる B…おおむね満足できる C…努力を要する

※斜線部分 (/) は評価の対象としない項目

理論上は「内容のまとまり（五つの領域）」と「3 観点」の組み合わせで、15 項目を評価することができますが、各単元で 15 項目全てを評価するのは現実的ではありません。よって、各授業で「記録に残す評価」を精選し、各単元で評価する項目を調整することで、学期や学年を通して 15 項目を偏りなく評価することが理想的です。

実際に評価をつける際には、a・b・c の組み合わせにより、観点別評価の A～C を決定する方法があります。ただ、この方法は評価対象が多い場合は、処理が複雑になりがちです。なので、評価対象について a = 3 点、b = 2 点、c = 1 点などと定め、その合計点によって観点別評価の A～C を決定する方法が考えられます。例えば、「知識・技能」について「内容のまとまり（五つの領域）」を合わせて 50 点の配点をしたとして、40 点以上なら A、39 点～11 点は B、10 点以下は C とするというような決め方です。また、評定を決定する際にも、観点別評価の A = 3 点、B = 2 点、C = 1 とし、その合計点により、5 段階の評定を決定することができます。

Step 4 各活動の評価基準表（ルーブリック）の作成

授業中に行う言語活動やパフォーマンステストを評価する場合は、その評価基準表としてルーブリックを作成することが効果的です。ルーブリックを作成することで、教師間で統一された基準で評価することができます。また、事前に生徒とルーブリックの内容を共有することにより、どのような点に留意して活動に取り組めばよいかを伝えることができます。

◆パフォーマンステストのルーブリック例

○領域 「話すこと [発表]」

○内容 「おすすめの観光地」についてのプレゼンテーション

○「思考・判断・表現」の条件

条件 1 おすすめの観光地を提示している。

条件 2 その観光地について場所などの基本的情報を述べている。

条件 3 その観光地について魅力を二つ以上述べている。

○採点の基準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的学習に取り組む態度
a	・適切に語彙や表現が使用されている。 ・聞き取りやすい声量及び流暢さで話している。	・三つの条件を満たした上で、自分の体験や感情などを含めて詳しく話している。	・三つの条件を満たした上で、自分の体験や感情などを含めて詳しく話そうとしている。
b	・おおむね理解できる語彙や表現が使用されている。 ・おおむね聞き取りやすい声量及び流暢さで話している。	・三つの条件を満たして話している。	・三つの条件を満たして話そうとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

5 おわりに

これまで見たように、学習評価は学習指導において大変重要な役割を担っています。しかし、いま一度確認しておきたいのは、評価は手段であって目的ではないということです。評価が生徒の学びを促進するためにあるという点を肝に銘じておきましょう。

最後に、ここまであまり触れることができなかつた重要な点を3点指摘しておきたいと思います。

1点目は、ICT機器の使用についてです。学習評価に関しては「教師が評価のための「記録」に労力を割かれて、指導に注力できていない」という課題も指摘されています。令和元年度に「GIGAスクール構想」が打ち出され、「高速大容量の通信ネットワーク」を使用した「1人1台端末」を利用して「個別最適化された創造性を育む教育の実現」に向けてICT機器の教育現場での活用が進められています。「ICT機器を基盤とした先端技術の活用」を通じた生徒の学習改善が主たる目的になっていますが、一方で、教師にとっても「統合型校務支援システムをはじめとしたICTの導入・運用を加速していくことで、授業準備や成績処理等の負担軽減にも資するもの」とであると指摘されています。「ロイロノート・スクール」や「Microsoft Teams」などのアプリケーションを学習評価で活用している学校も増えています。生徒の作品提出、評価、クラス全体での共有などが容易になり、教師による評価だけでなく生徒による自己評価、相互評価など多様な活用も考えられます。学校の状況に合わせて積極的に活用してみましょう。

2点目は、生徒の自己評価が重要であるという点です。学習指導要領では、教師中心ではなく生徒中心の学習活動が強調されています。評価についても同じことが言えます。生徒自身の評価、生徒同士の評価を積極的に取り入れ、活動の振り返りを充実させましょう。その際、念頭に置いておかなければならないのは、その活動が生徒の主体的、自律的な学びにつながっているかどうか、という点です。次の学びに活かされるような評価を意識しましょう。

3点目は、CAN-DOリストや評価規準を作成する際に大変参考になるCEFR（欧州言語共通参照枠）についてです。学習指導要領でも触れられているとおり、CAN-DOリストやルーブリックなど評価規準の作成については、ヨーロッパの複言語主義を目指した取り組みの成果であるCEFRから強い影響を受けています。日本人学習者のために再構成されたCEFR-Jもあります。パフォーマンステストの採点の基準の作成などにも活用してみましょう。

❖手引を作成するに当たり参照した資料・書籍❖

- ・『各中・高等学校の外国語教育における「CAN-DOリスト」の形での学習到達目標設定のための手引き』 文部科学省 2013
- ・「カリキュラム・マネジメントについて」 文部科学省 2017
(https://www.mext.go.jp/content/1421692_5.pdf)
- ・『【高等学校 外国語編】学習指導要領（平成30年告示）解説』 文部科学省 2018
- ・『「指導と評価の一体化」のための 学習評価に関する参考資料 高等学校 外国語』 国立教育政策研究所 2021
- ・『小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校等における児童生徒の学習評価及び指導要録の改善等について（通知）』 文部科学省 2019
- ・『ペーパーテスト&パフォーマンステスト例が満載！ 高等学校外国語新3観点の学習評価完全ガイドブック』 菅正隆、松下信之著 明治図書 2022

⑤ 授業を充実させるための Questions & Suggestions

Q1：授業をする上で大切なことはどんなことでしょうか。

授業とは教師からの適切な働きかけで生徒自らが思考し、今まで知らなかったことに自ら気づき、練習や活動を通して、これまでできなかったことをできるようにすることです。またその学びを自分の生活の中に生かしていこうとする姿勢を育むことを目指して行うものです。

外国語教育の果たす役割は語学力の向上にとどまりません。今後、社会的・職業的な場面で外国語を用いたコミュニケーションを行う機会が格段に増えるでしょう。また、多民族・多文化社会には、お互いを理解し助け合いながら共に生きていく姿勢が必要とされます。基礎的な知識・技能と、それらを活用して社会と主体的に関わっていくための思考力・判断力・表現力は、生徒たちの将来的な素地として、もはや欠かせないことなのです。それらを育成するのが、私たちの英語教師の使命と言えるでしょう。

Q2：生徒が自分の授業を理解しているのか不安です。

英語を通して何を考え何を学ぶかを授業計画の段階から十分に考え、授業1時間の中で「生徒に身に付けさせたい力は何か」を明確にして、授業づくりをしましょう。その上で、生徒のモチベーションを高めるために導入を工夫したり、生徒が思考力・判断力・表現力を発揮する場面をどこに設定するかを考えてみたりしましょう。また、公開授業週間などを利用して、他の教師の授業を見学させてもらうことで、授業改善のヒントを得ることもできます。

Q3：授業中の言語活動に意欲的に取り組ませるにはどうしたらよいでしょうか。

授業中に行う言語活動について、その活動の目的とその活動によってどのような力が身に付くのか伝えましょう。また、できたことを褒めたり、間違いを恐れないことを称えたりしましょう。そうすることで、「難しそうだけどやってみよう！」と前向きに捉えて取り組むようになるでしょう。

Q4：英語で質問して、生徒が答えられない時はどのように対応すればいいのでしょうか。

生徒が教師の英語を理解できているかを確認してみましょう。理解できていない場合は、簡単な英語で言い換えてみたり、ジェスチャーや写真など伝えるヒントになるものを使用したりするとよいでしょう。生徒の英語での発信力が不足していることも考えられます。「単語で答えてもいいよ」などと声をかけて、何が言えないのかを引き出すよう心がけます。また、言いたいことを確認した上で適切な英語表現を教え、改めて英語で答えさせることもできます。

生徒の英語力に問題がない場合は、教師の発問の仕方を変えてみましょう。一般的に、WH 疑問文よりも選択疑問文や Yes-No 疑問文の方が答えやすいものです。また、事実を問う発問は答えを知らないと回答できませんが、意見や感想を問う発問であれば答えを知らなくても回答できる可能性が高くなります。

Q5：生徒が日本語訳を知りたいがります。どうしたらよいでしょうか。

「読むこと」の領域の目標は、目的に応じて必要な情報を読み取り、書き手の意図や概要、要点を捉えることにあります。英語を日本語に置き換えることが、この目標の達成のために本当に効果的かを考える必要があります。

ただし、初出の文法事項や複雑な構文が含まれた英文で生徒がつまずきそうなときは、日本語でそのポイントの説明をすることは生徒の理解を助けます。しかし、“きれいな和訳”を生徒に求める必要はありません。大切なことは、生徒が英語のまま理解できるよう、サポートすることです。

Q6：文法指導はどのようにすればよいでしょうか。

英語の文法について学ぶことは大切です。特定の文法項目のみを取り上げて機械的に練習させるのではなく、言語活動に必要な文法事項を、活動を通して自然に活用できるように指導しましょう。また、文法の練習問題を進める必要がある場合も、答え合わせをした文の一部を変えて自分のことをペアで述べ合うなどの活動を行えば、やり取りの活動にも発展させることができます。

Q7：リスニング教材を使用していますが、これでリスニング力がつくのか心配です。

リスニング教材を用いてどのような力を付けさせるのかを明確にしましょう。音声を正確に聞き取らせたい場合は、音の連結や脱落などに注目して何度も聞き取らせるとよいでしょう。発音することができない音は正確に聞き取ることができないと言われていています。音の変化のパターンは限られていますので、音読を通して音の変化を体験させることが効果的です。

概要や要点を聞き取らせる場合は、事前に聞く目的や状況を示しておきます。「強く発音されている語句に注意して聞きましょう」など、具体的に何に気を付けて聞けばよいのか意識させたり、答え合わせの際には、根拠を尋ねたりすることも効果的です。

Q8：ライティングの活動で生徒に翻訳アプリを使用させてもよいのでしょうか。

書くことの論理性や内容面を指導したい場合は、翻訳アプリや添削アプリを使用することにより、言語使用の正確さの面での負担が軽減できるため、内容や論理性に集中して指導が行えます。

しかし、日本語で書いた文章を翻訳アプリで英語に翻訳した場合、生徒が理解していないような語彙や表現が使われることもあります。受容語彙と発信語彙を区別し、中学校までに学習した 2,500 語程度を発信語彙として活用できるように指導することも必要です。生徒が書いたものを基に、発表ややり取りに取り組みさせることで統合的な言語活動を目指すことも考えられます。

Q9：ライティングでは、文法や語彙の誤りを修正するべきですか。

ライティングの添削には多くの時間や労力がかかります。また、多くの誤りを一度に指摘しても生徒が処理しきれないことが考えられます。項目を絞って誤りに下線を施したり、多く見られる誤りに説明を加えたりして、生徒自らが考えて修正できるようにしましょう。

また、添削よりも、内容についてのフィードバックや書く回数を増やすことのほうが、量的にも質的にも向上するという報告があります (Semke, 1984; Rob, Ross, & Shortreed, 1986; Baba & Nitta, 2010)。

Q10：授業に余裕がなく、教科書や考査範囲をこなすことで精一杯です。

教師の役割は教科書を最初から最後まで教えることではなく、教科書を活用しながら学習指導要領に示された資質・能力を生徒に身に付けさせることです。Lesson や Part の目標をよく理解し、ポイントを踏まえて授業を行いましょ。教師が一方向的に説明するのではなく、ペアワークやグループワークに取り組みせたり、調べたことを共有させたり、考えを伝え合わせたりしましょう。教師が教える場面と生徒同士が活動する場面を意識して授業を計画することで、メリハリのある授業になります。授業の主演は教師ではなく、生徒です。生徒の主體的な学びをサポートするために、言語活動のクリエイターかつファシリテーターになることを目指すとよいでしょう。

Q11：パフォーマンステストに向けてどのように指導していけばよいのでしょうか。

パフォーマンステストで使う表現を少しずつ身に付けさせたり、パフォーマンステストと似た形式の活動を取り入れたりしましょう。例えば、パフォーマンステストで「話すこと[発表]」を評価するのであれば、プレゼンテーションの流れや使う表現を指導したり、教科書の内容でミニプレゼンテーションを行ったりすることなどが考えられます。その際に、フィードバックを行うことで、パフォーマンステストに向けて改善させていくことができます。

Q12：ICTを活用した授業はどうすればできるようになりますか。

各種研修に参加する方法もありますが、YouTube 文部科学省公式チャンネル (MEXT Channel) に掲載されている動画を視聴するのもよいと思います。視学官・調査官の解説のような堅い内容から各種授業事例まで、1本約 15 分の動画が数多く公開されています。また、StuDX Style (スティーエックス・スタイル) では、端末の活用方法に関する優良事例等を数多く紹介しています。

⑥ 学習指導案作成例

「英語コミュニケーションⅠ」学習指導案

愛知県立〇〇高等学校
教諭 〇〇 〇〇

1 日時・実施場所

令和〇年〇月〇日 (〇) 第〇限 (〇〇 : 〇〇 ~ 〇〇 : 〇〇)
〇—〇教室

2 学 級

〇〇科 第〇学年〇組 (〇名)

3 学級観

学級の特徴とともに、指導により目指す生徒像、期待される変容、目標達成に向けた見通しを記述します。

素直でまじめな生徒が多い。表現活動には活発に取り組むことができるが、語彙や表現が不足しているため、正確に理解することや、即興性のあるやり取りにおいて課題が残る。ワークシートや活動中のフィードバックなどを通して、正確さと論理性を身に付けさせたい。

4 教 材

- (1) 教科書 〇〇〇〇 English Communication I (〇〇社)
単元名 Lesson 4 100 Things to Do to Save the Earth (Part 〇 pp. 〇 ~ 〇)
(2) 補助教材 Logical Writing for Communication (〇〇.Co. Ltd.)

5 単元の目標

「学習指導マネジメントシート」と連動させ、全ての観点を一体的に記載します。

地球温暖化対策に取り組む環境活動家に関する文章を聞いたり読んだりして、概要や要点、詳細を捉えるとともに、その内容や言語材料を活用して自分の考えをまとめ、話したり書いたりして伝え合うことができる。

6 関係する領域別目標 (学年のCAN-DO)

学年のCAN-DOを記載します。
※本単元で扱わない領域は記載する必要はありません。

聞くこと	家庭や学校における身近な話題についての情報や説明を聞き取ったり、相手からの指示を理解したりすることができる。
読むこと	家庭や学校における身近な話題についての情報や説明を読み取ったり、相手からの指示を理解したりすることができる。
話すこと [発表]	日常的な話題や、社会的な話題について、理由や具体例を交えながら、90秒程度で自分の意見を発表できる。
書くこと	家庭や学校生活などの日常生活で聞いたり読んだりしたこと、学んだことや体験したこと、概要や要点、その話題に関する意見やその理由を50語程度で書くことができる。

7 単元の評価規準 (五つの領域ごとの評価規準の設定)

領域別目標と関連させ、本単元で扱う領域について記入します。

評価の観点	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
聞くこと	<ul style="list-style-type: none"> 地球温暖化に関する文章を聞き取るために必要となる発音や語彙を理解している。 地球温暖化に関する文章を聞き取る技能を身に付けている。 	自分の考えを発表するために、地球温暖化に関する対話文を聞いて、概要や要点、詳細を整理して捉えている。	自分の考えを発表するために、地球温暖化に関する対話文を聞いて、概要や要点、詳細を整理して捉えようとしている。

読むこと	<ul style="list-style-type: none"> 文章を読み取るために必要となる語彙や仮定法を理解している。 地球温暖化に関する文章を読み取る技能を身に付けている。 	自分の考えを発表するために、地球温暖化に関する説明文を読んで、概要や要点、詳細を整理して捉えている。	自分の考えを発表するために、地球温暖化に関する説明文を読んで、概要や要点、詳細を整理して捉えようとしている。
話すこと [発表]	<ul style="list-style-type: none"> 情報や考えを述べるために必要となる語彙や因果関係を表す表現、文におけるイントネーション等を理解している。 地球温暖化対策への取組についての情報や考えを理由とともに話して伝える技能を身に付けている。 	聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、地球温暖化について聞いたり読んだりしたことを活用しながら、自分が考えた地球温暖化対策への取組について理由とともに口頭で発表している。	聞き手に自分の考えをよく理解してもらえるように、地球温暖化について聞いたり読んだりしたことを活用しながら、自分が考えた地球温暖化対策への取組について理由とともに口頭で発表しようとしている。
書くこと	<ul style="list-style-type: none"> 情報や考えを書いて伝えるために必要となる語彙や因果関係を表す表現等を理解している。 地球温暖化対策への取組についての情報や考えを理由とともに書いて伝える技能を身に付けている。 	読み手に自分の考えをよく理解してもらえるように、地球温暖化について聞いたり読んだりしたことを活用しながら、自分が考えた地球温暖化対策への取組について理由とともに書いて伝えている。	読み手に自分の考えをよく理解してもらえるように、地球温暖化について聞いたり読んだりしたことを活用しながら、自分が考えた地球温暖化対策への取組について理由とともに書いて伝えている。

8 パフォーマンステスト

○領域

話すこと [発表]

○内容

自分たちができる地球温暖化対策について、自分の考えを理由とともに話して伝える。

○「思考・判断・表現」についての三つの条件

条件1：地球温暖化が引き起こす問題を示している。

条件2：どのような対策を行うかを述べている。

条件3：対策が必要な理由を二つ以上述べている。

○採点の基準

	知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
a	<ul style="list-style-type: none"> 語彙や表現が適切に使用されている。 聞き手に分かりやすい音声等で話している。 	三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを理由や具体例とともに詳しく述べて伝えている。	三つの条件を満たした上で、関連した情報や自分の考えを理由や具体例とともに詳しく述べて伝えようとしている
b	<ul style="list-style-type: none"> 多少の誤りはあるが、理解に支障のない語彙や表現を使って話して伝えている。 理解に支障のない音声等で話して伝えている。 	三つの条件を満たして話して伝えている。	三つの条件を満たして話して伝えようとしている。
c	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。	「b」を満たしていない。

「十分満足できる」状況と判断されるもの：a

「おおむね満足できる」状況と判断されるもの：b

「努力を要する」状況と判断されるもの：c

単元の目標の達成度を測るためのパフォーマンステストを設定します。
※一回のパフォーマンステストで複数の単元を通して設定した目標の達成度を測ることも考えられます。

9 単元の指導計画 ※網掛けは記録に残す評価の場面。

(聞…聞くこと, 読…読むこと, や…話すこと [やり取り], 発…話すこと [発表], 書…書くこと)

時間	ねらい (■), 言語活動等 (丸数字)	内容のまとめ					生徒の活動状況を見届ける観点 (【 】)・方法 (○)
		聞	読	や	発	書	
1	<p>■単元の目標を理解する。</p> <p>■単元内容の背景となる知識を活性化する。</p> <p>①教師による Oral Introduction を聞き, 内容を確認するとともに, ペアで感想を述べ合う。</p> <p>②地球温暖化について知っていることを, クラス全体で共有する。</p> <p>③本文全体を読み, ワークシートの質問に答える。</p> <p>④単元の目標 (今後行うグループ・ワークで話し合った内容を基に, 地球温暖化対策への取組について, 自分の考えを発表すること)を確認する。</p>	○	○		○		<p>【知】適切な語句・表現を使用しているか。</p> <p>【思】概要や要点を適切に捉えているか。</p> <p>【態】積極的に自分の意見を伝えようとしているか。</p> <p>○ワークシート</p> <p>○活動の観察</p>
2 4 (本時2時間目)	<p>■各セッション (§ 1 ~ § 3) の内容を口頭で要約し, それに対する感想や意見を伝える。</p> <p>①教科書の説明文を読み, 地球温暖化に関する課題やその解決策をメモにまとめる。</p> <p>②読み取った内容に関する感想や自分の考えを, ①のメモを参考にしながらペアで述べ合う。その際, 聞き手は疑問点やさらに聞きたいことなどを質問する。</p> <p>③ペアを変えて, ②の活動を何度も行う。</p>	○	○		○		<p>【知】論理構成上必要な語彙・表現を適切に使用しているか。</p> <p>【思】論理性に注意して相手に伝えているか。</p> <p>【態】会話が継続するよう工夫しているか。</p> <p>○メモの内容</p> <p>○活動の観察</p>
5	<p>■モデルスピーチを聞いて, スピーチの構成, 表現, 音声上の留意点, 発表態度を確認し, スピーチを行う際の参考にする。</p> <p>①ALT が地球温暖化について考えていることや解決のために行っていることを説明したモデルスピーチを聞いて, 内容をクラスで確認する。</p> <p>②①で聞いたスピーチの音声や発表態度について, クラスで確認する。</p> <p>③スピーチ原稿を読んで, スピーチの構成や使用されている語句・表現を確認する。</p>	○				○	<p>【思】話し手の意図を適切に捉えているか。</p> <p>【態】構成や語句, 表現を自分のスピーチに生かそうとしているか。</p> <p>○活動の観察</p>
6	<p>■課題を説明し, その改善のために自分ができることを, 理由を含めて話して伝える。</p> <p>①地球温暖化の問題を解決するために自分ができる取組について考え, グループで述べ合う。</p> <p>②次の事項を含めたスピーチのアウトラインやメモを作成する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・地球温暖化の問題について自分が取り上げる課題とその理由 ・改善のために自分ができる取組 <p>③モデルスピーチを再度視聴し, 音声や発表態度などを確認する。</p> <p>④②で作成したアウトラインやメモを活用し, ペアでスピーチを行う。また, 互いのスピーチの改善点を伝え合う。</p> <p>⑤ペアを変えて, ④と同じ活動を行う。</p> <p>⑥目標の達成状況を振り返り, 課題を明確にする。</p>				○	○	<p>【知】適切な語句や表現を使用しているか。</p> <p>【思】論理的な構成になっているか。</p> <p>【態】自分の発表の課題を的確に捉え, 改善策を考えようとしているか。</p> <p>○活動の観察</p> <p>○振り返りシート</p>
7	<p>パフォーマンステスト</p> <p>・自分たちができる地球温暖化対策について, 自分の考えを理由とともに話して伝える。</p>					知 思 態	※採点の基準等は「7 パフォーマンステスト」を参照。
後日	定期考査	知 思	知 思			知 思	

10 本時の目標

環境活動家のスピーチの意図を捉えたり、論理構成や表現、話し方を学習したりすることを通して、因果関係に留意した話し方を身に付けられるようにする。

単元の評価規準を達成するための、その授業における目標を設定します。
1時間に盛り込みすぎず、年間を通してバランスよく設定するようにします。

11 本時の展開（2／7時間）

時間	指導過程	生徒の学習活動	指導上の留意点・支援等
5分	Small Talk (帯活動)	<ul style="list-style-type: none"> 環境に配慮していることをペアで1分間伝え合う。 代表生徒がクラスに発表する。 	<ul style="list-style-type: none"> 会話が続きにくい場合は、表現集の活用を促す。 数名の生徒に発表させる。
5分	写真の描写	<ul style="list-style-type: none"> 本レッスンの表紙絵を見て、写っているものをペアで述べ合う。 	<ul style="list-style-type: none"> 何を描写すればよいか分からない生徒には、What do you think this man is doing? などの質問をしながら注目すべき点を示す。
5分	音読（新出語句）	<ul style="list-style-type: none"> 新出語句を発音しながら、意味と発音を覚える。 	<ul style="list-style-type: none"> 発音の難しい語句は、音節で区切りながら繰り返し発音するなど、文字を見て発音できるよう指導する。
5分	リスニング	<ul style="list-style-type: none"> 音声を聞きながら、本文に関する質問に答える。 	<ul style="list-style-type: none"> 本文の概要を問う質問を2問用意する。 質問は事前に示して、聞き取りのポイントを明確にする。
8分	内容把握 (Q&A)	<ul style="list-style-type: none"> 教師の質問に英語で答えながら、本文の要点を理解する。 	<ul style="list-style-type: none"> 必要に応じて写真や地図を用いて内容を理解させる。 文法や語句の誤りは、"You mean ~?" などトリキャストして修正を促す。
6分	音読 Repeating Buzz reading Overlapping	<ul style="list-style-type: none"> 内容が相手に伝わるように音読する。 	<ul style="list-style-type: none"> 意味内容が相手に伝わるよう、強調すべき語句や話す速度・声の大きさなどに注意するよう指導する。
4分	要約	<ul style="list-style-type: none"> 筆者の主張や、その理由を表す語句を中心に、キーワードをメモする。 	<ul style="list-style-type: none"> 文ではなく、語句や図でメモをさせる。語句を線で結ぶなど、キーワード同士の関係性も意識させる。
8分	Retelling	<ul style="list-style-type: none"> キーワードを基にペアで本文の内容を口頭で伝え合う。 ペアを替えて数回行う。 	<ul style="list-style-type: none"> 根拠や主張を表す表現を使うように指導する。
4分	振り返り	<ul style="list-style-type: none"> 相手に伝わりやすい話し方について分かったことと、今後の課題をワークシートに記入する。 	<ul style="list-style-type: none"> 具体的で実現可能な内容を記入できるようにアドバイスをする。

12 御高評